

地球は丸くなどなかった。球体のかたちなどまるで見えず、宇宙との境界も曖昧なまま、暗い真綿のような闇ですべてがつかなくなっていた。多少の濃淡が感じられるのは、きっと手前の窓の一部が曇っているからだ。

一番地球に近い星は当然のことながら月、そのときは半月。何年も何十年もその左半分に磨きをかけ、これ以上磨くとぱりんと割れてしまいそうな薄さに仕上がっていた。口に入れば薄氷のように歯に沁みるだろう。そして光らない右半分は宇宙に存在しないかのようなだった。

この半月を目にすればとりあえず、左半分の白黄色の輝きに目を奪われ、右半分の暗がりについては想像だにしない。人間の意識と視力はその程度なのだ。けれどすぐに気がつく。月は元々丸く、右半分にも「何か」があるはずだと。そう思い直して、じっと見つめてみると、確かに「何か」がある気がしてくる。

いや、あの右半分には何も無い。目に見えないのだから何も無い。半分は昼間の太陽の熱に溶かされてトロトロのお粥になって闇の中に霧散してしまったのだと考える人間も、この広い世界には居るだろうし居たはずだ。

科学を信じない人間は、現代では落ちこぼれの変人扱いだが、自分こそその謎を解く人間だと気負い、半月の右半分を見定めたものだと言を飛んだ人間も居た。科学技術の最先端を身につけながらも、科学を信じ切ることが出来ない人間は不幸だろうか。宇宙の闇にひそむ神や悪魔を必死で凝視し、息を殺して対峙した人間は滑稽だろうか。

答えは見つからない。

さて、窓の外の半月だが。

光は地上から見る月光の何倍も強く、その下方に位置するオライオンを、斜め上から鋭く射し下ろしていた。オライオンはギリシャ神話では勇ましい狩人で、その反り上がった肩とウエストの三つの星が、引き締まった屈強な身体を表している。七個の星々はそれぞれ何百光年もの距たりがあるはずなのに、ふかふかの布に置かれたように静かだ。

やがて半月はオライオンの肩から離れ、ともに西の空に向かって落ちていく。

地球のかたちが現れるのはそれからしばらく経ってからだ。東の闇がうっすらと濃淡を現し、その濃淡は次第に線を作っていく。線はまだ闇の一部なのに、やがて糸になり紐になり、しだいに薄い層をつくる。細くて青白い明るみに染まりはじめ。

青白い中にオレンジ色が混じり始めると、地球の縁も闇を薄めて丸くじつとりと和らいでく

る。

地球はやはり球体なのだ、このときはっきりする。

十月初旬、パリのシャルル・ド・ゴール空港を飛び立った夜間飛行便は、日本に到着する数時間前、南側の座席に座る乗客に、このような光景を見せてくれる。機内は明かりを消され、乗客は眠りの中に押し込められているけれど、こっそりシェードを引き上げて夜空の星々をひと目見たいと思う乗客には、宇宙を支配しているものの圧倒的な明快さを見せつけた。さらに、輝く半月もオライオンもやがて東からやってくる曙の朱赤には敵わないことを、息苦しさとともに教えてくれました。

シェードを半分引き上げ、低い振動音の中で宇宙の劇的な支配を、かたずをのむようにして見つめている若い女と初老の男について、まずは何から書けばよいのだろう。

若い女の名は里山あやめという。二十六歳だがショートカットの小顔のために、どうかすると成人前に見られることもあった。整った顔立ちとは言いがたいが鼻はかたちよく尖り、唇は小さくて、性格は別にして見た目はキューートで俊敏に見える。じっとしていればだが。

彼女は二十六歳の若さで恋愛や結婚という人並みの幸せを諦めている。

その理由をさまざま挙げるができるけれど、まず最初に、生まれてこのかた走ったこともジャンプしたことも無い、股関節の変形が原因。思春期になり身長が伸びて、足の不具合は

目立ってきた。

次に挙げられる理由は母親里山ひそかの階段からの転落死。あやめが十六歳の夏、急な階段から落ちて、頸椎を骨折してあっけなく死んだ。日本の年間の転倒・転落死の数は、交通事故死より多くなった昨今だが、十六歳のあやめにとっては、不幸の塊が自分の家めがけて落ちてきたように感じられた。四年後の父紀彦の再婚も多少の影響はあったけれど、あやめが人生を諦める原因としては、彼女自身の誰にも話せない苦い恋愛体験も大きいだらう。

あやめは怒った顔をしないかわりに大きな笑顔も見せない。何があってもさやさやと自分の前を通過させてしまう。そうなのね、と軽く頷くのは、何も感じていませんよ、という意味表示でもあった。目と唇を寄せてクシヤッと笑って見せるときもあるけれど、内心を隠す演技であり場を保つ精一杯のサービスだった。

高校に行っていたころは誰も友達がいなかった。それが辛くもなかった。靴箱に履きつぶされたハイヒールが片方入れられていたときは、その意味がはっきり伝わり、うん確かにそうよね、うちは生涯こういうものは履けんよね、と納得してゴミ箱に捨てた。別に教えてもらわなくても判つとる、と思っただけでそれ以上の感情は湧いてこなかった。

地元の短大ではいじめこそ無かったが、身体の動きに手を差し伸べられる親切が、逆に辛かった。大丈夫、平気平気と、無理に明るい声を返して切り抜けた。

決してひねくれない。むしろ周囲の人間に気を遣いすぎて疲れてしまうタイプなのだ。気を遣われるのも好きでは無かった。走ったり跳んだりが出来ないだけで、日常生活に不

自由はなく歩くことも出来るし、毎日の犬の散歩も欠かしたことはない。右足を出すとき、わずかに外側に放り出すように見え、着地の瞬間一センチ程度身体が沈む、その程度だ。

これがあやめの大雑把な紹介だが、いまは両親と暮らした福岡県別府べふの古い家を出て、そこからバスで二十分のピッチェリアの二階で暮らしている。

薬院大通りから少し入った場所にあるピッチェリア「ルッコラ」に來た理由は、後ほど書くことにするが、ともかく犬の散歩というのは、この店の女主人から頼まれた朝晩の仕事なのだ。犬種は豆柴で、女主人のマンションでは飼えなくてお店の裏庭に犬小屋を作った。豆柴なのであやめにも扱い易い。散歩はいつも浄水通りを動物園前まで往復する。最近は飼い主をあやめだと思っている様子だ。

あやめにも得意なことはいくつかある。彼女が「ルッコラ」に來た理由の一つでもあるので、やはりここで触れておこう。

あやめはスフレケーキを作る名人なのだ。

スフレケーキを作る醍醐味は、オープンの中で破裂直前まで膨らむときの緊張感だ。爆発する。もうだめだ。百八十度のオープン内で膨張した内部の空気が、ケーキの頭をぎりぎりまで大きくする。ケーキの組織は必死で耐えている。やがて外側がこんがりと焼けてかたがが出来上がり、内側からの圧力もかたを壊す直前でおさまると、バランス良く静かにケーキが誕生するのだ。

オープンの窓から覗くスフレケーキは、地球誕生のようだった。あやめはいつも、良う頑

張ったね、と祝った。それから少し、悲しくなった。うちはうまく誕生できなかった。人間もケーキもちょっとした加減で失敗作が生まれる。けれど食べてみれば、失敗してつぶれたスフレケーキの方が濃厚な味わいと香りがあつたりする。

あやめは中に入れるものに次々と挑戦した。季節の果物、たとえば栗、イチジク、ブルーベリーなど。チーズやヨーグルトとの相性の良し悪しは自分では判断できなくて、知り合いの「ルッコラ」の女主人に味見してもらった。女主人の五島さんはあやめの母親ぐらいの年齢で、いつもがっしりした腰回りに赤いエプロンを巻き付けて、ピザ窯の薪を運んでいた。辛かったらこの二階に来ん？と言われて、そのとき初めて、辛い自分に気がついた。古家での一人暮らしをやめて、ピッチェリアの二階に住むことになった理由の一つはそういうことだ。

犬の散歩のほかには、午前中の厨房でスフレを焼く。メニューのドルチェに「スフレケーキ」が加わったが、小さい字でカシュナッツやサツマイモ、ニンジンなどと書いてもらう。五島さんの評価では、日々腕を上げているようだ。他のケーキ類には手を出していない。家賃はタダだけど、スフレケーキを買ってあげてもらう分だけでは足りないの、いまだに父親から生活費を振り込んでもらっている。全部は使わないようにしているので、少しずつ貯金が増えていくのがうれしい。

ここまで書けば、あやめは悲観的な人間でもひねくれ者でもないことが判るだろう。けれど恵まれた幸福な二十代の女性とも言えない。

さて、あやめの母親ひそかは専業主婦だったが、ひそかの伯母で、生きていれば九十七歳になる桐谷久美子は、戦前九州帝国大学医学部で看護長をつとめていたキャリアウーマンの先駆けだ。あやめが生まれる前に死んでいるのだけれど、白衣姿の写真をひそかから見せられたことがある。今もその写真は別府の古家にあるはずだ。

この桐谷久美子にあやめはひそかな憧れを持っている。子供のころから病院に行くことが多かったあやめだが、一枚の写真の中で微笑する桐谷久美子ほどの美人看護婦には、一度もお目にかかったことがなかった。格が違う。やさしいけれどこころざしが違う。それは一目で解った。病院の廊下を急ぎ足で歩き、手短かに声を掛ける看護婦たちに、あやめはいつも手敵しかった。桐谷久美子と比べていた。

その人は、ひそかの父親つまりあやめの祖父の長姉に当たる人で、祖父はこの桐谷久美子を母親のように慕っていたという。家が貧しかったけれど看護婦をしながら弟を大学にまでやった。そう聞いていたからかも知れないが、母性的な暖かさを感じさせた。

ずいぶん遠い時代のご先祖様だが、その写真を見せられたときあやめはドキリとした。桐谷久美子はベッドサイドにタオルのようなものを胸に抱えて立っていて、ベッドには上半身を起こした首の長いハンサムな外国の男がいた。男は久美子と同時に笑ったような気配で、二人ともカメラを見てはいるのだが、二人の間に通う親密な空気が、写真の中に立ちこめていた。シャッターを切る直前には、お互いに顔を見つめて会話していたのではないだろうか。

写真の裏にはアンドレ・ジャッピー、一九三六年とメモがあった。

このアンドレ・ジャビーという男が、なぜ九大病院のベッドにいて桐谷久美子と写真におさまったのかをあやめが知るには、この写真へのさらに強い関心と、過去に遡るエネルギーが要る。

写真の中のアンドレ・ジャビーは手に懐中時計を持っている。いまはこの懐中時計、あやめの持ち物になっていた。

あやめの想像ではアンドレ・ジャビーから久美子がもらい、久美子から祖父へ、母親へ、ときたものを、母の死後に自分がもらった、というか勝手に所有した。母の持ち物の中で一番美しかったので、手放せなくなったのだ。

一九三六年にすでにアンドレ・ジャビーが使っていた時計である。懐中時計の年齢としてはかなりの高齢だ。数年前までは竜頭りゅうづを巻けば動いていたけれど、今はもう寿命が尽きたらしい。それでもときどき竜頭を巻いてみた。何かの拍子に秒針がびくりと痙攣けいれんすることがある。死んではいけないのかも知れないとあやめは思った。

時計は物なのでいのちとは無縁だが、あやめは自分が気に入った物にはいのちを感じた。関心の無い物は平気でゴミ箱へ放り込んだ。関心を持てるかどうかは、美しいかどうかで、他の基準は無い。

「ルッコラ」から城南線に出て、信号のある横断歩道を渡ったところに鉢嶺はちみね時計店がある。城南線に面してはいるが間口も狭く美容院とクレープ屋に挟まれて目立たない。日除け替わりに

眼鏡美人のポスターが貼ってあり、眼鏡屋かと間違えそうだが、眼鏡はサングラスしか置いていない。

二年前に妻の容子を亡くした鉢嶺一良は、いったんは店を閉じる決心をした。妻が生きている間は妻への配慮で続けてきた。店は妻の父親から受け継いだものだし、途絶えさせてはならないと考えていたのだが、病床の妻の口から、自分が死んだら店を畳んで少しラクをしなさいよ、と冗談まじりに言われたのを遺言のように受け止めた。肺がんの末期でも容子は明るかった。東京に出た息子と娘が見舞いに来ても、まだ死なないからと追いつ返した。追いつ返して四日後に息を引き取った。

一良の人生は妻がすべてだったと言ってもいい。東京の息子と娘は容子の最初の結婚で出来た子で、彼との間には子供が居ない。前夫に女が出来て離婚したあと、店員だった一良と一緒にになった。容子の子供たちがまだ中学生と小学生だったし、子供たちの気持ちを考え、一良は子供を望まなかった。一良にとっては長年憧れ親しんできた女を妻に出来たのだから、それ以上望めば罰が当たると考えた。

一良は妻より先に自分が死ぬものだと思っていた。年も三つ上だし、自分が先に死んでも妻は平穩な老後を送るだろう。心底それを望んでいた。容子の居ない人生を生きることなど、考えられなかった。

けれど病魔は妻の方に取り付いた。信じられないことに、一良の母親は八十九歳でまだ生きている。認知症を患ってはいるけれど施設の食事は栄養バランスも良く、そう簡単に死ぬこと

はなざさそうだ。こんなことがあるだろうか。

この二年間、自分でも良く生きてきたものだと思う。死ぬことが難しかったただけだ。

妻を亡くした六十六歳の男は世の中に相当数いるはずだ。妻を亡くしてもその全員が一良のように無力感に陥るはずはなく、もともと彼は男としての漲りに欠けていた。妻への依存心が強かった。それを彼自身認めてはいるけれど、依存心などではなく彼は妻を愛し、妻との生活以外に自分の人生を想像することが出来なかったただけだ。それは半ば正しかった。愛しているかどうかは本人の認識しだいなのだ。

彼は妻を愛していることに一度も疑いを持たなかったのだから、間違いなく愛していたのだ。それが証拠に、妻を亡くしたとたん、生きていけないと感じているではないか。生きていけないと感じているのに、彼は生きていた。その事實は、自分の来し方への自信を失わせた。自身への自信を失った一良は、髪の毛を一気に白くさせた。それでも髪の毛は在った。彼はときどき、妻の骨壺の前で、申し訳なさそうに白い髪の毛に手を載せた。手のひらから悲しみが心臓にまで降りてきた。やはり早く死にたい。容子のところへ行きたい。

鉢嶺時計店は木造二階家だ。妻が元気なときは近くのアパートで生活していたけれど、いまはアパートを引き払い時計店の二階に引っ越してきた。妻の骨壺は写真と一緒に高さも横幅も五十センチの仏壇に納めて毎日眺めている。後ろの壁に掛けた写真を見続けていると、動いている容子の映像が危うくなるので、そういうときは写真から目を外して、記憶の中の動画に走り込んだ。生暖かい容子の身体となじんだ匂いが伝わってくる幸せをかみしめながら、まだ消

えるなよ、と動いている容子に激しく命令した。容子が遺したもので一良にとっての必需品は枕カバーだった。けれど二年も経てば、容子の匂いが消えていく。消えるな、と命令しても駄目だった。

時計を並べたケースの内側のいつもの椅子に、身体を投げ出して新聞を読んでいるとき、道路に面したガラス扉が押し開けられ、細身の若い女性が顔半分でのぞき込んでいた。

「あろう」

「いらっしやい」

新聞を畳んだ。迷子の子猫がするりと入り込んだ気配。

「時計の修理、出来ますか」

「修理ならデパートの方が良いと思いますが。電池交換なら出来ます」

「電池ではありません。電池は入って無い時計です」

猫のようなだった女性はポケットから懐中時計を取り出し、ショーケースに載せた。ひと目で、この手の時計は無理だと解った。装飾が施されたクラシックな懐中時計で、しかも古そうだった。高価なものかも知れないが、体重を感じさせない細身の女には不似合いなほど重そうだった。

「動かんのぞ」

「……ちょっと見せてみんね」

想像した以上に重かった。

「故障でしようか」

「分解してみんとね」

「お金かかりますよね。分解するといくらかかりますか」

「それも開けてみんとね」

諦めて出て行ってほしかった。けれど女は懐中時計を受けとったまま店の中を見回すと、全部同じ時間なんですとね、と言う。何のことか最初判らなかつたが、

「いや、電波時計だけで、他のは少しずつ違いますよ」

「すごい」

目を輝かせた。

「全部、ほら、全部同じです。こんなにびったりだと針の兵隊みたいで怖くないですか」

「時計の針は、出来るだけ正確な方が良いです」

「そんなこと、当たり前です。時間がいろいろ在るより一緒の方が便利です。でも、こんなに沢山だと怖くないですか」

「怖くはないですよ」

「でも、壁中の時間に攻められてるみたい」

ショートカットの髪に半分隠れている耳たぶが赤く膨らんで見えたとき、この子から保護を求められているように感じて、一良は切羽詰まった使命感のようなものを胸の底で意識した。

足の運びが微妙にバランスを欠いて危なっかしく見えたせいもある。

あやめはわずかな興奮でも耳たぶに血液が通う体質、つまり日頃は色白で上気がすぐに皮膚に顕れるたちだが、それは一良の想像とは違い、むしろ不思議な空間に身をおいた高揚のせいだった。

「そこに椅子があるよ。座ったらどうですか」

「一つ、二つ、三つ、四つ……」

壁時計を数えて十六個。ふうと息を吐きながらあやめは椅子に座り、

「十六もあります」

「いや、もっとあるよ、腕時計も数えてみますか？ 百個はある」

かわいいな、と感じていたので、つい応じて言うと、

「そういう意味ではないです」

急にうち沈んだ。伝えたいものがあるけれど、どうせ伝わらないと諦めた表情だ。一良は何が気に障ったのか判らず、しかしまたどうでも良い気になり、

「うちは時計屋で、全部商品だから」

と言った。

「そうですね。人は死んでも時計は生きてるし、人より物の方が丈夫です」

一良は無表情になる。妻の死がうそ寒い風になって吹き込んだ。胸の底で鳴っている鼓動は、がらんどうの中に置き去りにされた時計。動いているのが不思議だが動いている。

この女をどこかで見たような気がした。毎朝浄水通りを小さい犬を連れて散歩している女だと横顔で気がついた。花柄のビニール袋を提げていていつも足下を見て歩いていた。

「今日は、犬を連れてきてないんだね」

「おじさんも犬好きですか」

「いや、苦手だ。近所なのかな家は」

「ルッコラって、そこにイタリアンがあるでしょ？ その店の二階」

「あのレストランのマダムシェフの娘さん？」

「あの人シェフではなくて、シェフは別にいて、私は娘ではないです」

「……その時計、分解修理が出来るかどうか、預かっておいても良いよ」

「ではお願いします」

「預かり書を書こうか」

「信じますおじさんか」

シヨーカーズの上に置かれた懐中時計を受け取り、慌てて名前を聞くと、里山あやめと名乗った。ぺこりと嬉しそうに頭を下げて出ていった。右肩が浮き沈みする後姿を見送る。

時計の分解修理は預かり書を書いてメーカーに出す。そうでなければ電池を替えるだけで、あとは壁やシヨーカーズの中の時計を売る。けれど預かった懐中時計は、そのどれでもない。なぜ預かってしまったのか。一良は自分の身体を包む厚い鎧に、かすかな鱗ひびが入ったように感じる。困ったなと思う反面、新鮮な心地もする。若い女だからか、まさか。若い女なら、外の

通りを太ももむき出して日に何十人も歩いてるし、目で追いつつも短いスカートと白い太ももにうんざりした。隣のクレープ屋に並ぶ子たちの話し声が聞こえてくると、そんな暇があれば道路掃除でもしてくれと思った。ついでにこんな子たちに日本の将来が担えるのか、こんな子たちが母親になれば、その子たちも役立たずになるに違いない。

と、こういう風に気持ち振れたあとは、自分の人生も日本の役になんか立たなかったと溜息になる。日本の役に立つ立たないの評価は、とどろき不意に、それも後ろめたい気分をともなつて、一良自身にやってきた。その瞬間ほど自分の老いを感じることは無かった。

まあいい、預かったものはとりあえず金庫に入れておこう。

良く確認することもなく、その日は懐中時計を金庫にしまった。そして思った。この時計を受け取りに、あの女はもう一度現れる。わざわざ修理を頼みに来たのだから、里山あやめにとっては、大事な時計に違いない。

不愉快きわまりなかった隣のクレープ屋に並ぶ馬鹿女たちの太ももが、触ったこともないし触りたくもないのに、すべすべと心地よさそうに感じられた。

一良はそれ以上考えなかったし、考えなければすべすべ感もすぐに遠のいた。二階に上がり妻の骨壺を覆う白い布に手を伸ばした。絹の布はすべすべしていたが箱は固かった。身体の底から感情がどくどくと湯玉になって噴き上がり、喉の奥を突き破って目の芯を貫いた。うなだれて耐えるしかなかった。それからゆっくり時計を見上げた。